

## 「自由意志」をめぐる論争対立をいかに理解すべきか？

高崎将平 (Shohei TAKASAKI)

東京大学

---

自由意志論争は、二千年以上の論戦を経て、解決に至るどころか、錯綜の一途をたどるばかりであるように思われる (van Inwagen 2004)。両立論者は、決定論的世界でも私たちは自由意志をもちうると主張する。リバタリアンは、自由意志と決定論は両立しないが、非決定論的な世界に自由意志の存立する余地があると論じる。懐疑論者は、決定論が真であれ偽であれ、私たちは自由意志をもたない／もちえないと主張する。さらに、これらの陣営の内部でさえ無数の見解が相対立している。他行為能力が自由意志に必要だと考える両立論者がいれば、フランクファート型事例に説得されて他行為能力なき自由を希求する両立論者もいる。出来事因果の枠内で理論構築を試みるリバタリアンがいれば、行為者因果が自由意志にとって本質的だと論じるリバタリアンもいる。私たちは自由意志をもたないが、自由意志をもつことは形而上学的に可能だと考える懐疑論者がいれば、自由意志はそもそも不整合な概念であると論じる懐疑論者もいる。

自由意志論争の厄介さの一部は、各々の論者が、主題であるところの「自由意志」という語をいかに理解すべきかについて見解を異にしているところに存する。たとえば、両立論者は自由意志を  $C_1$  という条件の下で理解し、 $C_1$  は決定論と両立すると論じる。非両立論者はそれに反論し、 $C_1$  は自由意志の条件として不十分であり、より強い条件  $C_2$  が必要であると論じる。そしてその  $C_2$  が決定論と両立しないのだと主張する、といった具合である。

この論争状況はしかし、そもそも自由意志をめぐる論争対立は真正な、価値のあるものなのかという懸念を生む。上述の両立論者と非両立論者は、「自由意志」という語に異なる意味論的値を割り当てる、異なる言語を話しているにすぎないのではないのか？両者の対立／不同意は見かけ上のものであり、単なる言葉上の問題にすぎないのではないのか？

本発表の目標は、以上の懸念をふまえて、自由意志をめぐる論争対立を適切に理解することである。まず、近年盛んに論じられている「メタ言語的交渉」(metalinguistic negotiation) というアイデア (Burgess and Plunkett 2013, Thomasson 2016) を手掛かりとして、自由意志

の論争対立（の一部）は単なる言葉上の論争ではなく、「自由意志の哲学はかくあるべきか」というメタ哲学上の真正な対立に帰着させることができることを論じる。そのうえで、メタ哲学上の具体的ないくつかの対立軸を検討することで、論争対立の適切な理解に資する論争のロードマップを素描することを目指したい。